法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

バビロンのマルドゥク像を巡って : 偶像崇拝とそれに関わる問題点

MATSUSHIMA, Eiko / 松島, 英子

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要
(巻 / Volume)
2
(開始ページ / Start Page)
225
(終了ページ / End Page)
241
(発行年 / Year)
2005-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003219

Hosei University Repository

バビロンのマルドゥク像を巡って
——偶像崇拝とそれに関わる問題点——

法政大学キャリアデザイン学部教授　松　島　英　子

はじめに

私はこれまで古代オリエントの文化史，とりわけメソポタミア文化におけるいくつかの現象を個人研究の領域としてきた。なかでも興味をもって取り組んできたのは，宗教儀式，神話文学，そして文字文化である。いうまでもなくこれらはそれぞれ複合的に絡み合っている。そのため研究を実際に進める場合には，さまざまないきさつで選択した題材を，宗教的観点，文学的観点など異なった角度から解釈したり分析したりすることになる。

ところで，古代メソポタミアという呼称に含まれる範囲は，時代からいえば一般的に紀元前三千年紀から前一千年紀末ころまで，地理的にはいわゆる中近東と呼ばれる地域のうち，今日のイラクの国土にほぼ相当する部分とその近隣・周辺地である。すなわち時間的・空間的に，今日のわれわれが住む場からは隔たったところにある。このような遠い世界の歴史・文化を対象とした研究が，いったいわれわれ自身にとって「意義」のあることなのかどうか，とりわけ紀元後21世紀に生きる人間が，生涯を通じたキャリア形成を考える際に，どのような意味づけができるのだろうか，これは私のような研究分野に身をおくものにとって，常に切実な問題である。だが少し突き詰めて考えてみれば，「文化」「文化史」を今の時代にどのように位置づけるか，という課題にかかわるのではあるまいか。本稿はこの視点を踏まえたうえで，私自身が目下関心を抱いている研究上の問題を論じようとするものである。

こうした観点から事柄を扱う場合に，理論的枠組みとその展開は欠かせないことになろう。しかしはじめから抽象的な議論になってしまうと，かえって問

Hosei University Repository

題の実態が見えにくくなるおそれがある。それゆえここでは具体的な題材を扱いつつ，次第に議論を集約していく方針としたい。

メソポタミアにおける偶像崇拝

紀元前三千年紀はじめからおよそキリスト紀元年近くまでの間，すなわちほぼ三千年にわたって栄え，高い文化水準を維持したメソポタミア世界にあって，宗教は常に人々の生活に密接に結びついていた。それは今日のわれわれが知っている宗教とはかなり異なる側面を持っていたが，たとえば日本列島の住民であれば誰でもどこかで見聞している，地域の守護神信仰などに類似する側面も，備えたものであった。その性格について雑駁な説明をすれば次のようになる。メソポタミアの人々は多くが都市に居住してさまざまな活動に携わっていたわけだが，都市には必ずその守護神がいて，町の中心に位置する神殿に祭られていた。人間と同じ姿をしている守護神とその家族や取り巻きの神々は，神殿に住み，人間と同じような日常生活を送っていると考えられていた。神と人との本質的な違いは，神には永遠の生命が，人には死すべき運命が割り当てられていたことだが，そのほかの点では，能力の優劣や姿の輝かしさに差はあるにせよ，見かけは変わらなかった。ただし彼らが労働をすることはない。神殿に住まう神々の生活に必要な衣食をはじめとする物資は，人々の労働によって生産され，人間世界の最高位を占める王が責任者となって，供給された。事実上人間が神々を扶養していたわけである。そしてこの供給は実際には祭儀の形で行われた。

だがこの「神々」は，実は神像すなわち「人形」であった。当時存在していた神々の像は，長く複雑で錯綜したメソポタミアの歴史，そしてメソポタミアが人々の記憶から消え去り，紀元後19世紀になってようやく再発見されるまでの長期にわたる忘却期間，さらには厳しい自然環境などの要因が重なるなか，ほぼ完全に失われてしまった。しかしこの地に残された文字資料と周辺地域の記録のなかに散見する記述によって，その様子を垣間見ることは可能である。メソポタミアの神像は「金銀で覆った木彫りの像」であり，豪華な衣装が着せられ，貴金属や貴石類をふんだんに使ったさまざまな装身具で飾り立てられていた。人々はそのような像を伏し拝み，有り余るほどの本物の食物を供物とし

Hosei University Repository

て毎日何回も捧げた。もちろん像が実際に食べることはないから，供物は結果的に人間が消費したのだが，当時の人々がこのことに特別の疑問を持つことはなかった。

そのようなわけで，典型的な「偶像崇拝」がメソポタミアでは行われていた。この偶像崇拝は，隣接する地域に住み，とりわけ前8世紀から6世紀にかけてメソポタミアからさまざまな政治的・軍事的圧力をこうむり，カルディア王朝のネブカドネザル2世（前654-562年）により国を滅ぼされ，一部の人々が「バビロン捕囚」されたユダヤの人々に目撃された。旧約聖書には，このような偶像崇拝を決して真似てはならないと人々を戒める，ユダヤの宗教指導者たちの言葉が見られる。もっとも，バビロニアで行われていた偶像崇拝を嘲笑し，厳しく批判して見習わぬよう戒めたということは，ユダヤ人のなかに影響を受ける人々が少なからずいた，と推測させるものだが。

さて偶像である神像は，いうまでもなく一度は誰かの手によって作られたものである。メソポタミアの神像は先にも述べたとおり，都市の神殿に安置されていたが，それは神が神殿に住んでいることを意味していた。つまり，客観的には人形でしかない神像だが，当時の人々の目には神そのものと映っていたのである。神そのものであれば，いかに像とはいえ，簡単に作ったり壊したりするわけにはいかない。移動させることは可能だが，それは神自身が動くことになるので，それなりの理由や意味づけがなければならない。とくに守護神が，本拠地としている町を離れるようなことになれば，一大事である。これはメソポタミアで起きたさまざまな事柄の意味や影響を理解する上で，非常に重要なことである。前7-8世紀におきた，バビロンの主神マルドゥクの像をめぐる一連の事件を，この観点から扱ってみることにしたい。

バビロンのマルドゥク像

バビロンはメソポタミアの歴史を通じて，特別の地位を占めた都市である。前18世紀後半に有能な王ハンムラビが出現して，たんなる一都市国家を，広大な領土を支配する統一国家に発展させた結果，この町はメソポタミアの中心都市の地位を獲得した。その後政治情勢はさまざまに変化したが，バビロンの地位が揺らぐことはなかった。たとえ前9世紀以降，北部のアッシリアの政治

Hosei University Repository

的・軍事的力が拡大し，やがて圧倒的優勢を誇る時期を迎えるようになっても，文化的・精神的中心地としての役割を譲ることはなかった。その守護神がマルドゥクであり，神殿エサギラに祭られた。この神はとりわけ前二千年紀後半以降，メソポタミアの神々のなかでも特段の地位を占めることとなり，神々の王と崇められた。その神の像が特別の重要性を帯びるようになったのは，当然のことであった。

メソポタミアの神像は，通常は守護する町の神殿に安置されている。これは，神が町の神殿に「住んでいる」ことを意味する。人々が神殿を立派に維持し神々に豊富な物資を奉納している限りは，すなわち，人々が神々を十分に扶養し快適な生活環境を保持している限りは，神々は満足しそこに居るから，町の安泰は保たれ，人々の安全と生活は保障される。しかし神々が何らかの理由で町や住人に不満を抱き，神殿にとどまることを拒否して出立してしまうと，町は守護者を失い，住人の安全や生活は危機に瀕することになる。天災，事故，戦争などによって神像が姿を消してしまうことは，長い歴史のなかで何度か起こった。それは，「神が人々に対して怒り，町を見捨てたこと」と理解された。もし神像が再び現れたら，それは「神が怒りをおさめ町に戻ってきた」ことになる。このように神は自己の意思で怒ったり許したりするのであるから，たとえ神像が姿を消したとしても，安易に人の手で新しい像を作るわけにはいかない。

バビロンはメソポタミアの政治的・文化的・精神的中心地，この地の人々にとっての「聖なる都」の地位を長期にわたって保持した町であった。この町の支配権を獲得することは，メソポタミアの王者となることを意味する。だがそのことゆえに，バビロンはその時々の政治情勢に応じて，多くの勢力から攻撃や占領の目標とされた。よそからやって来てこの町を一時的に占領した勢力の中には，マルドゥク像を奪取して自分たちの本拠地に持ち去ったものもあった。たとえば前13世紀には，アッシリア王トゥクルティ・ニヌルタがバビロンの町を攻撃し，「エサギラとバビロンの財産を戦利品として持ち出し，偉大なマルドゥクをその住まいから動かして，アッシュルへの道をたどらせた」。[1] また前12世紀の第二四半期には，隣国エラムの王がバビロニアに侵入したが，このとき各地から記念碑や彫像，浮き彫りなどとともに，神々の像も奪取した。エサ

Hosei University Repository

ギラからマルドゥク像もスーサの町に持ち去られ，やがて興ったイシン第二王朝のネブカドネザル1世（前1124-1103）は，これを奪回するため長くつらいエラム遠征を行わなければならなかった。また，前11世紀に外来のストゥ族がバビロニアに侵入した際にも，そのときの惨状を内容に反映していると思われる『エッラ叙事詩』のなかに，マルドゥク出立のエピソードが含まれているので，神像が一時的に姿を隠した可能性が考えられる。

前8世紀のアッシリア王によるバビロンの破壊とその後の復興活動

1）センナケリブによるバビロンの破壊

メソポタミアの北部を拠点として，前一千年紀に入ったころから強大な軍事力を行使するようになったアッシリアは，前8世紀には南部バビロニアにも大きく勢力を拡大した。センナケリブ王（前704-681）は一度は自らの息子をバビロンの王位に就けることに成功したが，まもなくこの息子はエラムとバビロニアの連合勢力に殺された。激怒したセンナケリブはバビロンを激しく攻撃した。彼自身が残した碑文は，町を徹底的に破壊した後，「私の（＝アッシリアの）民の手は，バビロンに）住まう神々を捕らえ打ち砕いた」と述べる。[2] 一方バビロニアに伝わる年譜によれば，「ベール（＝マルドゥク）はアッシュルに滞在した」という。[3] こちらの表現を信じるならば，マルドゥクの神像はアッシリア軍によって奪取され，アッシリア本土に運ばれたことになる。つまり神自身が「捕虜」として，アッシリアの地に連行されたことになる。像が破壊されたのか，あるいは持ち去られたのか，確実に判断することは今のところ不可能である。バビロンの破壊がセンナケリブが言うほど大規模に行われたのかどうかについても，まだ議論はある。[4] ただこのとき宗教施設が集中的な攻撃を受けたことはほぼ間違いなく，マルドゥク像の姿は，確かにその神殿エサギラから消え去った。

バビロンはメソポタミアの人々にとって永遠の都であり，アッシリア人にしてみたところで，この町を特別な目で見ていたことに変わりはない。その都を破壊したセンナケリブの行為は，恐ろしく信じがたい蛮行と受けとめられたに違いない。センナケリブの治世は，この事件を除いては比較的安定していたように見受けられるが，およそ10年後，彼は自分の息子の一人に殺された。当時

Hosei University Repository

この二つの出来事の間に，漠然と暗い因果関係を感じた人は，少なくなかったろう。後継の王エサルハッドン（前680-669）の即位にかなりの混乱が伴ったことは，よく知られている。エサルハッドンが早い時期からバビロニアの復興に取り組んだのも，このような不安定な空気を一新し，前王の極端な政策を軌道修正して，親バビロニア勢力の反感を収める狙いがあっからだろう。彼が決意したのは，バビロニアの諸神殿の再建と，神々の像の返還である。

2）バビロンの神殿復旧事業

エサルハッドンによるマルドゥク神像の復旧と，この像をおさめる神殿エサギラ再建の経緯については，さきに拙著『メソポタミアの神像』において順を追って説明した。[5] 繰り返しの記述は避けたいが，本稿の論旨に深くかかわることであるため，その概要を以下にごく手短にまとめておく。

バビロンの神殿の破壊は，センナケリブのかなり特異な反バビロニア感情に依拠しているが，たとえひどく乱暴であっても，先王の行為をあからさまに批判するわけには行かない。エサルハッドンの王碑文は，マルドゥク像が姿を消した理由と経緯を，「偉大な主マルドゥクは怒りに震た。エサギラとバビロンに対してその心は激昂した。嵐のような激怒のなか，エサギラとバビロンはうち棄てられ，荒地となった」と説明している。メソポタミアの伝統的な神像観を利用して，バビロニア人が「神を怒らせ」，その結果神が町にとどまることを拒否し出立してしまったとする。だがほどなくして神はバビロンに戻ることを決意した。碑文の説明によれば，マルドゥクは70年間町を放置するつもりで座所を離れたが，やがて心を和ませ，11年目に帰還を決意したという。[6]

さてエサルハッドンは，まず新しい事業に着手するにあたって，その正当性を神々から認めてもらうために，卜占を何度も繰り返した。こうして「明らかな是」の答えを得たことを自他共に確認した後，アッシリアの本拠地であるアッシュルの町のアッシュル神の神殿のなかに，神像復旧のためのアトリエ（ビート・ムンム）を設け，作業に携わる技術者，すなわちさまざまな巧み技に精通した職人たちを任命した。木工師，金銀細工師，鋳金師，彫金師，貴石の細工師などである。また上質の金，選りすぐりの貴石類，その他さまざまな高価な材料を，マルドゥクをはじめとするバビロニアの神々の像の復興のため

Hosei University Repository

に，各地から調達したという。

碑文の記述をそのまま素直に受け取ると，マルドゥクをはじめとするバビロニアの神々の像は，全面的に新しくされたことになる。バビロニアから戦勝記念に奪い取ってきた後どこかに保管していた像を，持ち出してきて手入れしたのではなく，新たに作り直したと理解される。少なくともエサルハッドンの言い分を信じるならば，復興事業に彼が着手した時点で，もとの神々の像は失われてしまっていたか，残っていたとしても，部分的に手を入れて再生できるような状態ではなかった可能性が大きい。

バビロニア各地の神殿の主である神々の像は，こうして次々と復興された。これらは，ただの木彫りの物体である像が「神」になるための「口をすすぎ清め開く儀式（ミース・ピー）」を経て晴れて神像となり，次々とバビロニアに送り返されていった。しかし，もっとも重要な地位を占めるバビロンの主神マルドゥクとその后神ザルパニートゥの像が，本来の座所であるエサギラに帰還したのは，バビロニアに伝わる年譜によれば，エサルハッドンが死去した翌年，息子のアッシュルバニパル（前669-627）がアッシリアの王位に，もう一人の息子シャマシュ・シュム・ウキーン（前669-653）がバビロンの王位に就いた翌年，前668年のことである。エサルハッドンの碑文のなかには，あたかも自身でマルドゥク像をバビロンに導きいれたように記述した文章が含まれているが，これは事実とは異なる。そうした問題も含め，神像の復旧をめぐって何が起きていたのか見極めることが，本稿の論点の中核となる。

3）マルドゥクに関する一祭儀：衣装献納式「ルブシュトゥ」

エサルハッドン治世期のマルドゥク像の問題と深くかかわるのが，この神が登場するある宗教儀式である。先にも述べたように，人々は神像を生きている神そのものと理解した。神々の生活の世話をすることは，その神が居るはずの町に住んでいる人間の基本的な務めであったから，人々は人形である神像を相手に，毎日食物や飲み物を奉納し，またときどき神々に入浴させたり，衣装を着替えさせたりした。メソポタミアの人々は身だしなみを整え，きちんとした衣類を身にまとうことを重んじた。神々はその高貴な身分にふさわしい豪華な衣装に包まれていなければならなかった。国の王は，神々すなわち神殿に置か

Hosei University Repository

れた神像のために，神殿の行政官に命じ職人たちを組織して豪華な衣装を作らせた。そしてときどき神々に衣装を献納し着せ替えた。「ルブシュトゥ」と呼ばれた神殿祭儀は，神像の衣装の着せ替え式で，バビロニアの神殿では春と秋にそれぞれ三回ずつ計年間六回，日取りを決めて定期的に行われた。祭りは何日かかけて挙行され，新しい衣装に着替えた神々の像が祭室を出て行進したり，食物や飲料が大げさに献納されたりした。

「ルブシュトゥ」については私自身がこれまでいくつかの論文にまとめ発表してきたし，また前掲の著書でもかなりの紙数をさいて記述した。メソポタミアの宗教の根幹にある「神人同形観」を端的に表す現象であり，興味深い側面を持っているが，詳細は過去の発表に委ねることにしよう。ただここで確認しておきたいのは，神々に衣装を着せ替える儀式が成立するためには，神像が実在しなければならないことである。像がなければ，衣装の着せ替えはできない。ところが現存の資料は，なかなか期待通りに物事を語ってはくれない。本稿ではこの問題に論点を絞りたい。

祭儀「ルブシュトゥ」の式次第を逐一説明してくれる文献は，私の知る限りでは残されていない。しかし前一千年紀の楔形文字テクストから断片的な情報を丹念に集めていくと，バビロニアのいくつかの主要神殿で執り行われていたことが確認できるし，儀式の様子もあるていど再構築することが可能である。なかでももっとも具体性に富む資料を得ることができるのは，バビロンのマルドゥク神殿で行われていた「ルブシュトゥ」である。主だった情報は，アッシリアの宮廷内外でさまざまな活動に携わっていた高官たちが，王に直接書き送った多数の書簡類のなかから拾い出すことができる。以下に主要なテクストの一覧をあげてみよう。それぞれの冒頭に記した「アルファベット＋数字」は，慣例的に使われている文書の特定番号である。(7)

a) ABL 496：発信人はラーシ・イルで，ウルール月（一年の6番目の月，現在の8月から9月に相当）3日から4日にかけての祭儀の進行について，王に報告している。さらに彼はこの後の式次第について，使者を派遣し指示を与えてくれるよう，王に求めている。ラーシ・イルはほかにも若干の書簡を王に送っているが，そのうちの一通ABL 498は，マルドゥクを含むバビロニアの神々の像の飾りつけにかかわるものである。

Hosei University Repository

b) ABL 338：発信人の名は欠損しているが，書簡冒頭の挨拶文の文体から，エサルハッドンの側近中の側近であったマール・イシュタルと推測されている。ウルール月3日から6日にかけての祭儀の進行に付随した問題を扱い，王の使者がバビロンに到着し，また祭りに参加するために，マルドゥクの長子ナブー神が本拠地とするボルシッパの町からやって来たと述べる。文中に閏月についての言及があり，天文計算と照合する限りでは，前670年あるいは667年に書かれたことになる。

c) CT 53, 116：発信人は不明（テクストの欠損による）。ウルール月3日と4日に行われたある神の「ルブシュトゥ」について述べる。文脈からこの神がベールすなわちマルドゥクであることは間違いなく，また文中に閏月と月食について同時に言及されていることから，前670年の成立と考えられる。ということは，内容が著しく類似する b) のテクストも前670年に書かれたことになる。

d) ABL 956：発信人名は欠損。タシュリートゥ月（一年の7番目の月，現在の9月から10月に相当）7日から8日にかけての祭儀の状況について王に報告し，さらにデールの町でも同じように祭儀が行われるので，全体の進行について王が使者を派遣し指示を与えてくれるよう要請している。

このほか若干の文献資料があるが，目下は本稿の論旨に直接かかわらないので省略する。書簡の発信人はいずれも王の側近である。この王とは，文中の閏月への言及などさまざまなデータをつきあわせると，S. パルポラがいうように，エサルハッドンと断定できよう。[8] これまで述べたようにマルドゥク（文中では彼の別称であるベール（＝主）が使われている）がバビロンに帰還したのは前668年だから，これらの書簡が作成されたのはその二年前ということになる。

マルドゥクの神像が本来の座所にまだ戻っていない時期に，なぜその「衣装着せ替え式・ルブシュトゥ」について，高官たちが繰り返し王に書簡を送っているのだろうか。しかも具体的な儀式のやりかたや日程について，王の直接の指示を仰いでいるのである。

この矛盾には，すでにいく人かの研究者が気がついているのだが，あまり突

Hosei University Repository

き詰めて解明しようとした形跡は見当たらない。たとえばS. パルポラはあっさりと，儀式は「仮の像」を使って行われた，と説明する。本来の像が存在していなくとも，儀式の伝統は保持しなければならなかったから，仮/偽の像で間に合わせた，というのである。[9] しかし，マルドゥク像の復興はエサルハッドンとその宮廷にとって，もっとも重要な課題のひとつであった。実に多くの王碑文や書簡類がこれをめぐって作成された。それでありながら，人々が一言の断りもなく仮/偽の像のことに言及するだろうか？しかもそれは一度だけのことではない。いかにも不自然な説明に思われる。

さらには以下のような理由により，私は仮/偽の像が用いられたという解釈を否定したい。

まず最初にあげたいのは，繰り返しになるがメソポタミアの神像は，ただの「像」とは考えられていなかったことである。人々にとって神像は生きた神そのものであった。像が見当たらないからといって，安易に仮の像を作って物事を間に合わせるようなことはできなかった。たとえばシッパルの守護神シャマシュの像をめぐるあるエピソードは，像の再制作には特別の口実が必要であり，安易に取りかかれる事柄ではなかったことを端的に物語っている。大英博物館所蔵の「太陽神のタブレット」によれば，前11世紀に起きたストゥ族のバビロニア侵入に伴う混乱の中で，シッパルの町にあった神殿エバッバルから，シャマシュの神像が失われてしまった。ときの王は祭殿の前に神のシンボルである「太陽円盤」を懸け，祭儀を整えて体裁を維持しようとしたが，神殿は幾多の苦難に見舞われた。ようやく前9世紀になって，「神が帰還の意思を表明した」ことが確認されたため，神像の再製作が実現する運びとなった。[10] だがそれまでには，およそ二百年という長い月日を必要としたのである。この期間にシャマシュの仮/偽の像が利用された形跡はまったくない。神像は神自身と直結していたのであり，仮の像が存在することは理屈の上からありえないはずである。

次にあげられる理由は，バビロニアの年譜が以下のように明言していることである。

「センナケリブの（治世期）8年間，エサルハッドンの（治世期）12年間，（合計）20年間ベール（＝マルドゥク）神はアッシリアに滞在した。（この間）アキートゥ祭は執り行われなかった。」（*ABC*, Chronicle 14, 32-33 // Chronicle

Hosei University Repository

16, 1-4)

バビロンの守護神が本来の座所に不在であったため，この神が主役を演じる新年の祭りアキートゥを行うことができなかったことが，このように明言されている。エサギラで執り行われる新年の祭りは，バビロニアにおけるもっとも重要な行事のひとつであった。これが「執り行われなかった」と明記されているのだから，本当に中断していたのであろう。

メソポタミアの神殿の祭儀は，実際には神像を用いた「人形芝居」であった。祭の遂行のため人形の実在が不可欠であることはいうまでもないが，その人形が「仮の像」で代行できるような軽い存在であったとは，私にはとうてい考えられない。

復旧事業にかかわった人

ベール＝マルドゥク像の衣装着せ替え式「ルブシュトゥ」に関する重要な情報源のひとつ a) ABL 496の発信人であるラーシ・イルは，ほかにも少なくとも4通の手紙をエサルハッドン王に書き送っている。そのうちの1通ABL 498で話題にしているのは，バビロニアの神々の像の修復に関する細々とした事柄，とりわけ像が身につける装身具のことである。要旨はつぎのようになる：ウルクの町の守護神アヌのための冠と，マルドゥクの后神ザルパニートゥの衣を飾る黄金のアップリケ飾りは，いずれも完成した。これらは目下アッシュルの神殿の宝物庫に納まっていて，王から派遣された特別の役人の立会いがなければ庫をあけることができない。続く手紙の後半で彼は話題をがらりと変え，自分の身の回りの人々についての不満を王に訴えているのだが，このことから王とラーシ・イルとの関係をうかがい知ることができる。彼は王の側近の一人で，バビロニアの神々の像の復興事業の遂行責任者の一人であった。しかし同様の仕事についていた人間はほかにもいて，彼ら相互の関係はいささか複雑であった。

b) の差出人であるマール・イシュタルは，エサルハッドンの側近中の側近としてよく知られた人物で，神像や神殿復興のほかにもさまざまな事柄の処理に当たり，多数の書簡を残した。それらとの文体上の比較から，c) もマール・イシュタルが書いたものである可能性が高い。彼が残したほかのテクスト

Hosei University Repository

のうち，たとえばABL 340では，ナブー神の冠を飾る貴石について細々と報告しているし，ABL 476ではウルクの町の神々の像について言及している。またABL 1202ではナブー神の冠とこの神の本拠地であるボルシッパの神殿の供物に関して，不測の事態が持ち上がっていると，王に報告している。

このようにエサルハッドンと特定の廷臣たちは，バビロニアの神々の像と像が身につける装身具類，像の周囲に配する品々について，直接書簡を交わし打ち合わせを行っていた。これはとりもなおさず，紆余曲折はあったにせよバビロニアの神々の像の復旧活動が着実に進行していたこと，その経過を王は確実に把握し，自身で細々と指示を出していたことを物語っている。ということであれば，このような交信が行われていた時期には，像はまだ完成しておらず，本来の座所があるバビロニアの町には，当然戻ってはいない。神々のうちもっとも重要なマルドゥクとその后ザルパニートゥの像は，完成までに時間がかかった。それはひとつには，バビロンのエサギラの再建または修復がまだ完成しておらず，彼らが鎮座するにふさわしい環境が，十分整っていなかったためではなかろうか。神像が本来の座所を占め，そこで生きた存在として神の力を発揮するためには，周囲の設えも必要であった。また，ただの物体である像が神になるには，一定の儀式を経る必要があるが，これは「メース・ピー」と呼ばれる，神像の口を洗う儀式によって実現する。マルドゥク像の「メース・ピー」を自らの主導で行ったと述べるエサルハッドンの碑文の一部は，どうもその晴れの舞台に備えて，あらかじめ用意させていたものと考えられている。[11]

実はエサルハッドンは，一度はマルドゥクとその后ザルパニートゥの像をバビロンに送り返そうとしている。神像を運ぶための大掛かりな行列は，アッシュルの町を出発して350kmほど進み，現在のバグダッドの近くまでやってきたと思われる。しかしラッバナトと呼ばれる町に到着したとき，思いがけない出来事が起こった。[12] その後の経過は不明だが，神像の旅が中断したことだけは確かである。そしてエサルハッドンの治世中に，マルドゥクのバビロン帰還が実現することはなかった。

マルドゥク神像と祭儀

こうして見てきたように，先王センナケリブが破壊したバビロニアの諸神殿，

Hosei University Repository

とりわけバビロンのエサギラを座所とする主神マルドゥクの神像の復興に，エサルハッドンは取り組んだ。しかしその像は，少なくとも彼の治世中は，本来の住処に戻ることはなかった。しかしバビロンの神殿でマルドゥクが衣装を身に着ける儀式「ルブシュトゥ」が，目下あたかも進行しているように記述する書簡が，現に複数残っていることも事実である。本稿では一部省略したが，この儀式に関しては，ほかにも同じころに年代付けられるテクストで，これに言及している例がある。祭儀が何らかのかたちで現実味を帯びていたことは，疑いの余地がない。しかも「ルブシュトゥ」について手紙を書いている人々は，同時にマルドゥク像の復興に関する実務に携わっていた人々なのである。現在われわれが目の当たりにする資料がまったく出鱈目を語っているなら話は別だが，何らかの事実を反映しているのだとすれば，資料が語る事柄相互の間に，見たところ大きな矛盾が生じている。このことをどのように理解したらよいのだろうか。

いくつかの可能性が考えられよう。たとえば，文書の年代をずらして解釈することである。すなわち，「ルブシュトゥ」に関する文書の年代づけの決め手となったのは，さきにも触れたが文書の文中にある閏月への言及であり，それをもとにほかの文書などと比較しつつ天文学的な計算によって割り出したものだが，数字だけをみればこの条件に該当する年は前670年，すなわち次の王アッシュルバニパルの治世中とすることも可能なのである。しかし書簡の発信人の少なくとも一部は，エサルハッドン生存中に活躍した人々であることはさまざまな方面からも判明しているので，この王の時代に作成されたと考える方が妥当であろう。

また，マルドゥクの像がそれ自体では完成していて，まだバビロンに帰還してはいないものの，アッシリアのどこか，おそらくアッシュルの町の仮の神殿に安置されていた，と想像することも不可能ではない。しかし b）の文書にはバビロンという地名が明記されている。しかも祭儀に参加するため，近くの町ボルシッパの神ナブーがやってきたというのである。アッシリアのどこかの仮の地で催されたと考えるのには，今のところ無理がある。

次のように解釈することはできないだろうか。すなわち，マルドゥクの神像の制作（ないしは大掛かりな修復）と，神像に衣装を着せる儀式「ルブシュ

Hosei University Repository

トゥ」と，二つの事柄に関してほぼ同時に王に報告し援助を要請する書簡が送られていたこと，しかもそのような書簡の発信人が，少なくとも部分的に共通していたということは，どちらの事柄も，現在進行中であり，しかも同じような人物（複数）が関与していたのだ，と。資料をなるべく素直に読むことが正確な事実理解の第一歩だとすると，そこから引き出される唯一の可能性は，どちらも実際に何らかの形で進められていた，ということしかない。それはすなわち，像も祭儀も，双方とも復興の真っ最中であったことである。

言い方を変えれば次のようになる。センナケリブのバビロン破壊によって神像は失われたが，そればかりでなく神像が主体となって行われる祭儀も中断し，その手順が忘れられかけていた。それゆえ神殿の機能を回復するためには，たんに神像のみならず，像を動かして行う祭儀についても復興する必要があったのではあるまいか。神像が衣装を着る「ルブシュトゥ」の儀式について，王の側近でバビロンの祭儀の復活を責務とする高官たちは，あらたに式次第を取り決め細かい手順を整える任務にも携わっていたのではなかろうか。そこには王の細かな関与と，指示そして支援があった。「ルブシュトゥ」に関するいくつかの文書を，祭儀の手順整備に携わる人々がその「シナリオ」作りをしていた過程で書かれたもの，あるいは，一種の「予行演習」を行ったもの，と仮に理解するならば，記述の内容をあまり無理せずに受け入れることができる。そうであればその場に本物の神像がなくとも，つまり「生きた神」そのものであるはずの本来の神像がなくとも—まったくなくとも—かまわないことになる。あるいは仮にアッシリアのどこかで「リハーサル」をしていたとしても，資料の記述内容が事実と大きく矛盾することにはなるまい。

おわりに

こうして論じてきたマルドゥク像と「ルブシュトゥ」とにかかわる推測が，はたして事実を言い当てているのかどうか，今後さらなる検討の余地があろう。だがひとつ確実にいえることは，メソポタミアにおいて神像と祭儀は密接に結びついていたことである。神殿において日常繰り広げられていたのは，いわば大袈裟な「人形芝居」であった。それがユダヤの宗教指導者の嘲笑を買い，彼らの宗教がもともと大前提としていた偶像崇拝否定の叫び声をさらに高めるこ

Hosei University Repository

とになったのは，事実であろう。旧約聖書に見られる預言者たちの厳しい批判の言葉には「像を拝む宗教」と，「像を拒否する宗教」との明確な段差が現れている。後者のなかから次の新たな宗教的展開が生まれたことは紛れのない事実で，これは誰にも否定できまい。物を拝むことよりも契約や義を重んじ，絶対的な神格に対する服従を倫理的な義務とするユダヤ教は，たしかに新しい宗教の可能性を開いた。それがまた，キリスト教やイスラム教という，世界規模の宗教を育む土壌となったことも事実である。

しかし偶像崇拝は，現在でもさまざまな場所，さまざまな宗教，さまざまな人々の間に見られる。いわゆる世界規模の宗教においてさえ，変則的に，あるいはかなり目に見える形で取り入れられている例が少なくない。それがたとえば「素朴な信仰形態」「後進的な宗教」であるなどと，乱暴に片付けられるものでないことは，いうまでもない。信仰の対象を具象化する宗教も，それを極力避ける，あるいは拒否する宗教も，なんらかのかたちで人間の深い心の動きや思索とかかわっている。それぞれの宗教とそれが根付いた，あるいはそれを育んだ文化が，信仰の表現に形態を与えたのである。メソポタミアの宗教を「人形芝居」と笑って片付けることは簡単だが，それでは人々の心を理解することはできない。メソポタミアの人々は，得体の知れないカミの姿を，何とか具体的に把握したいと願った。また，自分たち人間の存在理由や存在意義を，何とか知りたいと願った。その説明を求めて実に多くの神話が編み出された事実が，人々のこうした探究心の強さを物語っている。

人々が考え抜いた末に思い至ったのが，神像を中心としたイデオロギーである。自分たちが住む町を守ってくれるのは，神殿に住まう神々であり，神像という具体的な姿をとって実在している。人間は神の生活を衣食住の物質面で支え，そのことによって自らの存在意義を実現している。神々は快適な生活がある限りは町にいて人々の安全を保障するが，ときには人々から受けた扱いに不満を抱き，怒りのあまり出立してしまうことがある。そうすると神像の姿は見えなくなり，人間の生活と安全は危機に瀕する。

メソポタミアの政治権力者にとって，神像の確保はもっとも重要な課題のひとつだった。それは都市とそこにすむ人々の生活基盤を保障するという，王権の役割の根幹に関わるものであった。エサルハッドンがバビロニアの神々の像

Hosei University Repository

の復興と本来の神殿への帰還に取り組んだのは，バビロニアの支配者としてもふさわしい存在であることを，内外に示す必要があったためであろう。神像ばかりでなく，神像が主役を演ずる主要な祭儀の復活も，また大きな課題であった。神があたかも生きているもののように，祭りの主役となり動き行動することが，神殿を機能させ人々を支えたのである。そのために王は，側近を通じて絶えず細々とした指示を与えていた。

長い歴史の中で，宗教と政治はさまざまなかたちで結びつき，互いに利用しあってきた。宗教的な像は，しばしば政治的な動きと結びついた。もう少し厳密な言い方をすれば，政治的な意図を持つ人々によって，利用されることがあった。センナケリブがマルドゥク像を破壊し，これをエサルハッドンが復興したのも，結局のところ政治的な意図の表現であったともいえる。だが「像」の意図的利用は，何も古代に限ったことではない。近代，現代においてもイデオロギーを背後に負う像は数多く作られ，人々の目に付くところに置かれた。像を意図的に立てたり掲げたりすることもあれば，特定の効果を狙って像を意図的に引き倒したり壊したりすることもある。神像の場合とはまったく文脈が異なるにせよ，最近でもそのような場面が報道されるのを見ることがあった。われわれはメソポタミアの「人形芝居」を笑ってばかりいられるだろうか。紀元後21世紀に生きる現代人だからといって，古代の人々の世界を，はるかかなたの異界のように考え無関心で済ませるとすれば，それはあまりにもったいないことと思うのだが。

［注］

(1) A.k. Grayson, *Assyrian and Babylonian Chronicles* (=*ABC*), TCS V, New York 1975, pp. 175-6, iv 5-6.

(2) D.D. Luckenbill, *The Annals of Sennacherib*, OIP II, Chicago 1924, p. 83 : 48, p. 137 : 37.

(3) *ABC*, p. 128, 78 ff.

(4) G/Frame, *Babylonia 689-627 B.C., A Political History*, Istanbul 1992, p. 53 f.

(5) 角川書店，2001年5月，p. 98 ff.

(6) R. Borger, *Die Inschriften Asarhaddons, König von Assyrien*, 1967,

Hosei University Repository

pp. 13-15. なお，この70年を11年に変えた理由は，「マルドゥクは運命を記したタブレットに書かれた数字をひっくり返した」ことになっているが，それはメソポタミアにおいて，十進法と六十進法が同時並行的に通用していたからこそ可能であった。楔形文字では，数字の60を示すサインと1を示すサインは同じ字形をしている。60+10を左右入れ替えると，10+60になるがこれは10+1とも読める。このような「文字のトリック」は，メソポタミアの文字作品では珍しいことではない。

(7) *ABL*=R. F. Harper, *Assyrian* and *Babylonian Letters Belonging to the K(oujunjik) Collection(s) of the British Museum*, 14 volumes. Chicago, 1892-1914. なお，本文中に文書の特定番号として使用する際，イタリック体にはしていない。

(8) S. Parpola, *LAS* II, p. 284.

(9) S. Parpola, *LAS II*, p. 188.

(10) L. W. King, *Babylonian Boundary Stones*, London, 1912, no. 24. 注6に言及の拙著pp. 65-68, 244-247も参照されたい。シャマシュの不在が長く続いた後，「神像の『モデル』を表した焼成粘土製品が発見された」ため，神が再びその姿を現す意思の表明があったとされ，神像の再製作が許容された。これは作為的に行われたある種の辻褄あわせと考えられている。

(11) B. Landsberger, *Brief eines Bischofs von Esagila an König Asarhaddon*, 1965, p. 22 ff., G. Frame, *Badylonia* 689-627 B.C., p. 77, note 69.

(12) S. Parpola, *LAS* 29=SAA 10, 24.

Hosei University Repository

Idolatry in Ancient Mesopotamia: The Statue of Marduk and Its Restoration

Eiko MATSUSHIMA

This paper discusses several aspects of idolatry in Ancient Mesopotamia, especially in the first millennium.

In each city of Mesopotamia, there was at least one temple where the city god and his consort were enshrined. As a matter of fact, gods were represented by statues generally made of wood and covered by gold. People identified the statue with the god himself (or the goddess herself) and treated it as if it were a living being. Every day they dedicated food and drink to the god('s statue) and changed the clothes, jewelry and articles belonging to it in spring and in autumn. People thus took care of the gods (in fact their statues). As long as the god, being treated carefully, is satisfied and stayed in his own temple, the city as well as its citizens were protected. But if he was not satisfied and angry with his people, he could abandon them and leave the city. In the history of Mesopotamia, such accidents often occurred.

In the 8th century B.C., the Assyrian king Sennacherib attacked Babylonia and its capital Babylon, the most eminent and holy city in Mesopotamia. He destroyed many temples, including Esagila, the temple of the city god Marduk. We do not know whether his statue was completely destroyed or simply captured by the Assyrians. Anyway, Marduk's statue disappeared from Babylon in 689 B.C. For certain political reasons Esarhaddon, who succeeded Sennacherib, wanted to restore the Marduk's statue and the cult of this god in Babylon by himself. However, the statue returned home not in his reign but in the first year of his successor, i.e., 668

Hosei University Repository

B.C.

We have several written documents concerning this event. Most of them are letters written by high officials in the court of Esarhaddon. They informed the king the details of restorative work. Some of them speak of a clothing ceremony for Marduk in Babylon. This is embarrassing because the statue of this god had not been completed during the reign of this king. After several examinations and discussions, this paper concludes that both the statue and the cult of Marduk were under restoration under the direction of Esarhaddon. It can be supposed that this very fact is most important because the cult is available only with the statue. If the statue disappears, so does the religious cult. This is one of the characteristic aspects of idolatry in Mesopotamia, and certainly of idolatry in general.